

体育における主体的・対話的で深い学びの実践

— ネット型ゲームのプレルボールを通して —

市 河 大 (文教大学教育研究所客員研究員)

加 藤 純 一 (文教大学教育学部)

Practice of Proactive, Interactive and Deep Learning in Physical Education : Through Playing Net Game Prell Ball

ICHIKAWA DAI, KATO JUNICHI

(Guest Researcher of Institute of Education, Bunkyo University)

(Faculty of Education, Bunkyo University)

要 旨

2020年完全実施予定の学習指導要領における主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)が注目されている。この主体的・対話的で深い学びは、これまでに蓄積された学校教育実践から指導方法や評価方法を改善していくが望まれている。よい体育授業の成立要件と言語活動の具体的展開について整理したことで、これから次期学習指導要領の視点とどのように関連し合っていくのかが筆者の関心事である。そこで本研究では、体育における「主体的・対話的な学び」を先取りした体育授業を行った。授業前後のアンケート結果から、授業の構成条件および言語活動の充実の関連について言及することとした。結果、現行学習指導要領で求められているところの「言語活動の充実」を図ることで「主体的・対話的で深い学び」が達成できるのではないかと結論に至った。

1. 問題の所在と本稿の目的

(1) 学習指導要領の改訂

2017年3月に新しい学習指導要領が告示された¹⁾。改訂された学習指導要領の基本指針として全教科で知・徳・体にわたって子供たちに「生きる力」を育むことが示されている。従来の生きる力は、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学習意欲」であったが、今回は「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱に再整理された。このことについて、当時の下村博文文部科学大臣は中央教育審議会への諮問において「新しい時代に必要となる資質・能力の育成」の観点からは、「『何を教えるか』という知識の質や量の改善はもちろんのこと、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが

必要であり、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習(いわゆる「アクティブ・ラーニング」)や、そのための指導の方法等を充実させていく必要がある」と述べている²⁾。

藤岡ら³⁾は、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習・指導方法が知識・技能の定着と、学習意欲を高める上でも効果的であると指摘していることから、各学校においては、学習・指導方法の在り方について研究を進め、授業改善を図ることが必要となると述べている。また、告示された学習指導要領においては、小・中学校においては、これまでと全く異なる指導方法を導入しなければならないと浮足立つ必要はなく、これまでの教育実践の蓄積を若手教員にもしっかり引き継ぎつつ、授業を工夫・改善する必要とも

明記されている⁴⁾。つまり「アクティブ・ラーニング」などの主体的・協働的に学ぶ学習とは、全く新しい学習方法というわけでない。山崎⁵⁾は主体的に学習に取り組む場面を設定していくためには指導方法や評価方法の改善が欠かせないと述べている。つまり、まずはこれまでに蓄積された学校教育実践から指導方法や評価方法を改善していくが最優先である。

2017年6月に告示された「学習指導要領解説体育編」⁶⁾では、深い学びについて「体育の見方・考え方」を働かせることが重要であると示された。教科の特性から見方・考え方を働かせることは重要であり、体育も同様の視点から、「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」と述べられていることには留意すべきであろう。ここには、小学校においては、運動やスポーツが楽しさや喜びを味わうことや体力の向上につながっていることに着目するとともに、「すること」だけでなく「みること」、「支えること」、「知ること」など、自己の適性等に応じて、運動やスポーツとの多様な関わり方について考えることを意図していることが窺える。

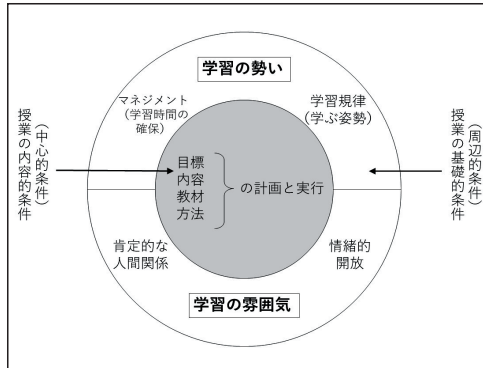
現行の「学習指導要領解説体育編」では、「生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現すること」が重視され、体育と保健との一層の関連や発達の段階に応じた指導内容の明確化・体系化を図りつつ、指導と評価の充実が進められてきた。その結果、運動やスポーツが好きな児童生徒の割合が高まったこと、体力の低下傾向に歯止めが掛かったことなどの一定の成果は見られたが、習得した知識及び技能を活用して課題解決をすることや、学習したことを相手に分かりやすく伝えること、さらには運動する子供とそ

うでない子供の二極化傾向が見られることなどの課題が散見された。そこで、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」を育成していく観点から、体育においても主体的・協働的な学習活動を推進するために「主体的・対話的で深い学び」の授業を行っていく必要があると考える。そのためには、体育授業の指導事項を整理し、体育における「主体的・対話的で深い学び」とは何かを明確にする必要があると考える。

(2) 体育の学習指導論

高橋ら⁷⁾は、体育授業のよい授業の条件について「授業の勢い」があり「学習の雰囲気」がよいことを記している。言い換えると子供たちが意欲的・主体的に参加し、仲間との肯定的な人間関係に支えられながら、学習内容を身に付けている状態となる。つまり、よい体育授業とは、確実に学力を身に付けることで授業が好きになり、子供の評価の高い授業といえる。高橋は、よい体育授業とは「基礎的条件」と「内容的条件」の二重構造によって成り立っていると考えている⁸⁾。「授業の基礎的条件」とは授業の目標や内容、方法とほとんど関係なく、すべての授業に常に要求されるもので、具体的には、学習従事時間が確保されていることや、学習規律が確立していること、学習の雰囲気が明るく肯定的な関わりがみられることが挙げられる。また「授業の中心的条件」とは、「授業の基礎的条件」をベースに目標や学習の設定や教材・教具の工夫、学習過程や学習形態、さらに説明、演示、発問、指導方略の適否という観点から、学習目標がはっきりしていること、教材・教具の工夫がみられること、学習方法スタイルが多様であること、教師の指導性が明確であることが挙げられる。この2つの条件は実際には互換関係にあるため、学習成果はプラスにもマイナスにも作用する。図1は高橋が示

したよい体育授業を成立させるためのイメージ図である。



(3) 体育の主体的・対話的で深い学び

学習指導要領で再整理された生きる力を育成するためには、主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニングの視点）をどのように捉え、授業に具現化できるか重要となってくる。1つめの「主体的な学び」とは、興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連づけながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自らの学習内容を振り返って次につなげることである。2つめの「対話的な学び」とは、子供同士の協働、教師や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じて、自らの考えを広げ深めることである。3つめの「深い学び」とは、習得・活用・探求の見通しの中で、教科等の特質に応じた見方や考え方を働かせ思考・判断・表現し、学習内容の深い理解につなげることである。これからの3つの視点から考えられた体育における主体的・対話的で深い学びをまとめると、表1のようになる。

表1 体育における主体的・対話的で深い学び

主体的な学び	運動の楽しさや健康の意義等に気付き、運動や健康についての興味や関心を高め、課題の解決に向けて自ら粘り強く取り組み、考察するとともに学習を振り返り、課題を修正したり新たな課題を設定したりするなどの主体的な学びを促すこと。
--------	---

対話的な学び	運動や健康についての課題の解決に向けて、児童が他者（書物等を含む）との対話を通して、自己の思考を広げたり深めたりするなどの対話的な学びを促すこと。
深い学び	それらの学びの過程を通して、自己の運動や健康についての課題を見付け、解決に向けて試行錯誤を重ねながら、思考を深め、よりよく解決するなどの深い学びを促すこと。

元文部科学省スポーツ・青少年局体育参事官付教科調査官の石川⁹⁾は、よい体育授業のためには、①指導のねらいや学習する内容が明確で、具体的であること、②生徒の実態、学習経験や技能の程度等に合った指導内容、学習課題を提示すること（特に「できた」と実感できるような運動課題の提示は重要である）、③生徒あるいは生徒たちの意思決定を保障した時間を確保すること、④仲間との関わりを豊かに、友達とどうやって良好な関係を築きながら学習していくかということ、⑤技能、態度、知識、思考・判断、これらをバランスよく指導できること、と述べている。この中で、特に思考・判断の時間を確実に確保するとの重要性が強調されていることに留意したい。体育授業は運動量の確保が必要ではあるが、ただ運動をさせるだけでなく、自分で決める、自分たちで考えてやってみるといった思考・判断をさせること、決めたことはやってみるといった実践と責任ある行動を取らせることで、運動の質は変化してくる。物理的な時間の確保のみに目が行かないようにすべきである。

ところで、思考・判断を育成する場面とは、対話的な学びや深い学びの視点を持った活動であると考えられる。言語活動は現行学習指導要領の方針を引き継いでいることはいまでもない。したがって次期学習指導要領においても言語活動を充実させていくことは、体

育においても当然ながら求められところである。加藤¹⁰⁾は、言語活動を児童・生徒に促す場合、①情報を与える、②それをもとに思考・判断させる、③アウトプットさせる、という3段階があるとの考えを示している。この3段階は高層化されており、発育・発達の段階に応じて展開が変わるとする。つまり教師が情報を提示することで児童・生徒に思考・判断させ、それをアウトプットさせる段階から、児童・生徒が自ら情報を求め、自ら思考・判断を行い、アウトプットする段階へ導かれるべきというのである。加藤が示した体育における3つの段階でのアウトプットの代表的な活動例を表2に示しておく。

表2 アウトプットの代表的な活動例¹⁰⁾

第1段階	<ul style="list-style-type: none"> ・記録ノートを作成させる ・授業の感想を述べさせる ・授業を振り返らせる ・自分自身、あるいは友達の技能を瞬間的に評価させる
第2段階	<ul style="list-style-type: none"> ・誰もが得点できる楽しさや喜びを味わうことができるように、学級全体で規則を選ばせる ・自己の記録をもとに自己評価を行わせる ・動きのポイントを焦点化する ・集団愛における役割を認識させる ・チームプレイ観察シートに記録させる
第3段階	<ul style="list-style-type: none"> ・作戦をチームで話し合う活動 ・作戦を振り返るために、兄弟チームと話し合う活動 ・適切な情報を蓄積する活動 ・情報の発信と情報の共有をする活動 ・論理的に練習方法などを修正していく活動 ・動きや技能のコツを言語化させる活動

さて、ここまでは体育の学習指導論として高橋の指摘するよい体育授業の成立要件と、加藤が指摘するところの現行の学習指導要領で求められている言語活動の充実の具体的展

開について見てきたが、これらが次期学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び」の視点とどのように関連し合っていくのかが筆者の関心事である。そしてそれは、学校教育実践における指導方法の工夫や評価方法の改善によってなされるものと考えている。

以上のような観点から、本稿では次期学習指導要領で謳われる「主体的・対話的な学び」を先取りした体育授業を行い、授業の構成条件および言語活動の充実の連関性について言及することとした。

2. 方法

ネット型ゲームは初めて経験する領域であることから、単元全体の学習課題を「みんなでボールをつなぎ、みんなが楽しくプレルボールの試合をしよう」とした。その手立てとして、学習過程の工夫や基礎基本の運動を充実させ、教材・教具を工夫し、集団の肯定的な関わりの生み出すための工夫と言語活動の充実を意識した授業実践を行った。

まず「主体的な学び」の視点として、明確なねらいと振り返りが重要となる。さらにそのねらいを確実に身に付け、上達しているという達成感が必要とされる。単元を通しての、あるいは本時において達成できるねらいを示すことで、児童に「できた」と実感させ、次の活動への意欲を持たせることで、主体的な活動を行わせることが期待できる。授業の実践では集団達成型学習として、ドリルをゲーム化して単元を追って、チームでパスを1分間で何回できるかを競わせた。また同時に、クラス的目標値を設定し、そこへの到達を促した。

次に「対話的な学び」の視点として、児童間でのアドバイスなどの対話を通して技能や思考を高めさせた。これにより協働的な活動が行われることを期待した。その際に、ただ話し合いを行わせるのではなく、「勝ちたい」「もっと上手になりたい」などの対話がより

具体的になるようなイメージを持たせるようにした。授業実践では、加藤の言語活動の3段階を意識し、特に第3段階の作戦をチームで話し合う活動にポイントを置き、メインゲームとメインゲームの間に長めの作戦会議をさせることで話し合いの必然性を高めた。

最後に「深い学び」の視点として、自ら思考・判断する、自分で決めたり考えたりしたことはやり抜く、結論を出したことに責任を持つことを重視した。授業の実践では、共通課題練習から課題を解決するための練習方法を選ばせたり、工夫したりする活動を設定した。

3. 結果

(1) 結果 1

研究方法で述べた3つの視点を踏まえて、2017年1月10日～27日にA小学校4年生（全33名）を対象として、プレルボール（ゲーム：ネット型8時間）の授業実践を行った。

毎授業後、質問紙によるこの3件法によるアンケートを実施（当てはまる；3点，どちらでもない；2点，当てはまらない；1点）し数値化し、平均値（SD）から分析を行なった。アンケートは、高橋ら¹⁴⁾の形成的授業評価を活用した。形成的授業評価とは、「意欲・関心（精一杯の運動，楽しさ）」「成果（わざや力の伸び，新しい発見，感動体験）」「学び方（自主的学習，自発的学習）」「協力（仲よく学習，教え合い，学び合い学習）」の4観点（9項目）によって評価するものである。

表3はプレルボールの形成的授業評価の結果を示したものである。これによれば、すべ

ての項目において高い数値を示しており、特に「主体的な学び」の視点としての「意欲・関心」では第1時から2.76と高く、さらに授業が進むにつれて値は上がる。その背景を分析すると手立てとしてのドリルゲームでパス・キャッチ・アタックを繰り返し練習したことが技能の定着につながり、さらにドリルゲームのチームプレル（集団達成型学習）での授業ごとの計測による記録の更新が「できた」という達成感をもたらし、他のチームの伸びをも称賛できる肯定的な人間関係が形成されたと考えられる（図2，図3参照。なお，チームプレルの第5時についての回数は，単元後半のため，ネットを挟んで行うやり方に変化したため，ネットに当たって減少したり，目標物ができて回数が増加したりしたと考えられる）。



図2 集団達成型学習のチームプレルの様子

表3 プレルボールの形成的授業評価結果

	第1時	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時	第7時	第8時
総合評価	2.36	2.40	2.54	2.68	2.70	2.76	2.74	2.78
成果	2.10	2.19	2.36	2.56	2.64	2.66	2.60	2.68
意欲・関心	2.76	2.80	2.79	2.92	2.89	2.87	2.97	2.97
学び方	2.08	2.28	2.48	2.66	2.63	2.79	2.74	2.75
協力	2.64	2.45	2.60	2.66	2.69	2.76	2.73	2.80

(3点満点)

目標	プレルの伸び記録							
	1/12	1/16	1/18	1/19	1/20	1/23	1/24	
30 ドットボール	8	15	16	18	12	19	20	
30 グリーンヒース	11	14	12	17	30	30	23	
47 青りんご	13	15	18	20	40	45	49	
32 イエローパインボール	17	15	20	23	41	37	37	
45 ブルーサー	20	17	19	17	23	34	40	
46 ツインヤス	14	16	17	19	18	30	30	
228 合計	83	92	102	113	164	195	199	

図3 チームプレルのパス成功回数の変化

「対話的な学び」の視点としては、学び方の第1時は2.07、第8時は2.75となり単元を通して増加していることが窺える。特に第3時から第4時の変化は、授業計画での課題解決学習及び作戦によるものと推察される。つまり自分たちで決めた課題を自分たちで練習すること、そして、それを生かして作戦を選んだり、組み立てたりすることで「友達と教え合ったり助け合ったりすること」ができたことと実感したものと考えられる。

(3) 結果2

結果1を踏まえて、プレルボールの実践授業のアンケートを行った。アンケートは授業前と授業後の2回行い、t検定を行った。アンケートは、高田ら¹²⁾が作成した診断・総括的授業評価を活用した。診断・総括的評価とは、「情意」「成果」「学び方」「社会的行動」の4つの質問因子（20項目）で構成されたアンケートである。その結果、成果、学びの質問因子の下位尺度が授業前と授業後での有意差が認められた。表4は実践前後のアンケート相違を示したものである。特に成果の因子項目の「体育をしている時、うまい子や強いチームを見てうまくできるやり方を考えることがある」、学び方因子項目の「体育では、自分からすすんで運動する」「体育が始まる前は、いつもはりきっている」「体育では、いろいろな運動が上手にできるようになる」が授業前と授業後との間で有意差が認められ

た。

表4 実践前後のアンケート相違 (n=33)

質問因子	授業前	授業後	t値	p
情意	2.69	2.80	1.82	0.0735 n.s.
成果	2.21	2.34	3.90	0.0002 **
学び方	2.25	2.50	2.04	0.0452 *
社会的行動	2.83	2.84	0.33	0.7400 n.s.

*:p<0.05, **:p<0.01

「深い学び」の視点として、本単元では、作戦カード、作戦盤を活用することで深い学びを促す試みを行った。図4は作戦会議の様子を示したものである。

他者と協働しながら運動に取り組ませるためには、教師の丁寧な児童への関わりと、学び合いを促す積極的な声かけが大切である。



図4 作戦会議の様子

そこで、個人やチームを積極的にほめたりアドバイスしたりするよう心掛け、授業実践を行った。結果、教師からの情報提供（作戦カードなど）、思考・判断を助けるための教具の工夫（作戦盤など）、教師からの声かけ（発問を含む）の3つの重要性が明らかとなった。また、活発の話し合いを行うには児童間の肯定的な人間関係も欠かせないファクターであることも確認された。

4. まとめと今後の課題

体育における学びを深化させるには、疑問

とそれに対する解決方法の提示，そしてそれを実践する態度をもってして成し遂げられるのではなかろうか。チームで話し合う活動を取り入れたとしても，子供たちが話し合うことの必要性をもたなければ，活発に行うことはできない。「上手になりたい」「勝ちたい」「学びたい」という気持ちがあつてこそ，深い学びが達成されるのではなかろうか。

本研究では、「主体的・対話的で深い学び」ための実践授業を行ったが，これらはすべての活動で実現できるのはなく，単元や授業計画の活動から，どこに視点をもつかによって違いが生じてくる。例えば対話する必要性がない場面に話し合いをしたり，無目的な相談を促したりしても児童は思考・判断はしない。その意味で，次期学習指導要領にある「主体的・対話的で深い学び」の実践には，現行の学習指導要領にある「言語活動の充実」は欠かせない要素であると言えよう。換言すれば，言語活動の充実を通して「主体的・対話的で深い学び」が実践され，その時に高橋の「よい体育授業」が達成されるということになる。

なお，今後の課題としては，さらに主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）の実践を他の領域や学年で実施することで本研究の成果を補完させつつ，特に情意と社会的行動面の関係についても掘り下げて調査したいと考えている。

[引用文献]

- 1) 文部科学省 (2017). 小学校学習指導要領. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf (2017.09.26)
- 2) 文部科学省 (2015). 初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について (諮問)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1353440

- (2017.10.01)
- 3) 藤岡宏章・遠藤孝夫・小岩和彦 (2015). 次期学習指導要領の視点整理と学校経営の方向性の検討ー「児童生徒に育成すべき資質・能力」とその実現のための学校経営の在り方ー, 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 14, pp.299-313.
- 4) 文部科学省 (2017). 幼稚園教育要領, 小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント,
- 5) 山崎保寿 (2017). 次期学習指導要領の改訂に備える学校経営の課題と展望 - 教育方法としてのアクティブ・ラーニングの効果的導入 - 学校経営研究, 42, pp.29-38.
- 6) 文部科学省 (2017). 学習指導要領解説 体育編,
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf (2017.09.26)
- 7) 高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖 (2010). 新版体育科教育学入門, 大修館書店, p.48
- 8) 高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖 (2010). 新版体育科教育学入門, 大修館書店, p.49
- 9) 佐藤豊・石川泰功成・大友智・下野六太 (2015). 体育科・保健体育科におけるよい授業を考える, 鹿屋体育大学学術研究紀要, 51, pp.39-51.
- 10) 加藤純一 (2012). 体育・保健体育での「言語活動の充実」の展開に関する一考察ー文教大学と越谷市教育委員会の取り組みからー, 文教大学教育研究所紀要, 22, pp.21-28.
- 11) 高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖 (2010). 新版体育科教育学入門, 大修館書店, p.85

- 12) 高田俊也・岡沢祥訓・高橋健夫 (2000).
態度測定による体育授業評価法の作成,
スポーツ教育学研究, 20, pp.31-40.

[謝 辞]

本論文作成につきましては，文教大学今田晃一先生にご指導とご助言をいただき，深く感謝いたします。

なお本研究の実践授業に関しても多くの教育実践者の先生方にお世話になりました。特に埼玉県越谷市立大袋小学校の木村将紀先生には，お忙しい中，多大なご苦勞をおかけしたことと思いますが，常に協力的に実践や研究等のアドバイスをいただき，調査等にも快くご協力いただき，心から感謝申し上げます。